会報
第203号
題字出口草露
発行者　〒679-5322佐用郡佐用町上石井685　安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会計　〒676-0011高砂市荒井町小松原2-12-5　石原智秋
振替　01110-5-6903
印刷所　株式会社甲南堂

令和元年度

兵庫短歌賞決まる

兵庫短歌賞　藤本美智子さん

奨励賞　前田美樹さん
奨励賞　藤本潮子さん
奨励賞　澁谷義人さん
特別賞　矢野義信さん
特別賞　奥田光子さん

緊急事態宣言解除後の朝霧の海辺

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に
島隠れゆく舟をしぞ思ふ
（よみびとしらず・古今集）

令和2年度総会に代えて

今年度（令和2年4月29日）の神戸短歌祭は新型コロナウイルスの関係で中止のやむなきに至った。3月30日の第3回、併せ2年度の第1回の幹事会も自粛中止ということで、審議承認なきまま、この場を借りて総会の取りまとめといたしたい。

3月18日の「兵庫短歌賞」の選考委員会は、神戸市勤労会館の閉鎖により、生田神社兵庫の宮会議室をお借りし、無事開催。兵庫短歌賞は藤本美智子氏の「樹木の言葉」。奨励賞に前田美樹氏の「あかりを垂らして」・藤本潮子氏「耳鳴りのごとし」・澁谷義人氏「酔い果てて」を、特別賞として矢野義信氏「夏の蔓」・奥田光子氏「生きゐる」を選定した。新人賞は前田美樹氏であったが、前田氏は平成28年度新人賞をすでに受賞されており、「奨励賞」とさせていただいた。この表彰式は11月21日の兵庫短歌祭開会に先立って行う予定。

催しの講演「和歌と異文化統合―『五七五七七』は和の韻律」（島内景二氏）もそのまま兵庫短歌祭に実施とする予定。

人事面の異動としては顧問は石橋妙子氏がご逝去され、4人。幹事は伊藤佐重子氏がご逝去され、49名。

令和元年度会計報告・当歌人クラブの活動記録は別掲のとおり（12頁）。本年度の活動予定は前年度を継続とする。

ところで、1月の初めの頃ある女の方から電話があり、『兵庫短歌賞』に応募したいが、私は体が不自由で、原稿用紙に書くこともできない。短歌が生きがいなんです」と言ってこられた。たなかみちさんの歌会の人で、相談をお勧めしたのであったが、中央歌壇、短歌ジャーナリズムに出ている人たちに比し、そうでない多くの者にとって「短歌とは何か」を改めて考えさせられた。どなたでも自分の作品がより多く共有されることは大きな喜びとなる。こうしたことにも、より働く歌人クラブでありたく願う。

それにしても高齢化に伴う会員の減少傾向は種々の分野においても共通した課題であるが、今一層の内容の充実を期し、老若男女、多くの人を呼び込むような更なる活性をはかりたいものである。

（安藤直彦）

兵庫短歌賞受賞

藤本美智子さん

受賞の言葉

この度は兵庫短歌賞を賜りましてありがとうございました。ハッとつき動かされた思いを言葉に浄化できるように推敲を重ねること、この思いを胸にこれからも精進してまいりたいと思います。

令和2年度役員

代表（事務局長兼務）　安藤　直彦
副代表　新屋　修一
　　桂　保子
事務局次長　福島　妙子
会計　石原　智秋
会計監査　兼貞　靖行
会報（委員長）　森嶋　郁子
　　藤本　朋世
顧問　小畑　庸子
　　楠田　立身
　　野瀬　昭二
　　藤井　幸子
事務局委員　大西よし子　加藤　直美
　　芝本　政宣　鈴木　裕子
　　廣庭由利子　藤岡　成子
　　藤本　朋世　藤本　則子
　　保田　ひで　山田　文
　　山本　圭子　山本みさよ
　　吉田千代美

令和元年度 兵庫短歌賞

藤本美智子（砂金）

1948年生まれ
西宮市在住
平成21年「砂金」入会
平成23年「砂金詩情賞」受賞
歌集『空の襞』
趣味　コーラス、山歩きなど

樹木の言葉

・陽のぬくみのせて差しき枝えだに冬のさくらもまた耀へり
・一歩づつ踏みしめてゆく川のほとり陽のぬくもりに背をおされて
・山際を風がゆくのか黄葉の樹木揺らぎをりおもひおもひに
・ざわめきのきこゆるごとき樹木の揺れ空のたかみを風とほりつつ
・立ちつくす樹木の言葉は幾年もあらぶる風に消されてゆかむ
・わたりゆく風のゆくへを木は知らぬ　つかのま交はす美しき言の葉
・一歩づつ下りてゆきし山の木段たどりつきたり布引の滝
・日に匂ふ山の紅葉のあかあかと友とのみちべ照らしくるるも
・おのおのの生まれし山に木は立ちていくとせ空をみあぐるべしや
・鳥見山のひのきの杜を過ぎりつつ遥けきくにを尋ねてゆかな
・ゆふぐれの仄あかるさに浮かびゐる梅檀の実はしんみりとして
・かそやかに銀木犀の匂ひくる日を待ちてをり　人待つやうに
・傷きまで空気に触れて松の葉は今日はらはらと振へやまざる
・合歓の木は冬のねむりを纏ひつつ幹の内がは水かけあがる
・武骨なるさまに立ちをり青き葉のまどろみてゐむ冬の百合樹
・遠景に松の並木のてつぺんは皆たひらなり空に圧されて
・ゆふぐれの川はしづかに流れゆく今日のできごと忘るるやうに
・水音のかそかに響く川のほとり松は天へとのぼりつづける
・満天星のつぶらな赤き新芽より墓原の空あかるみはじむ
・鳥のくる木の嬉しさよ巨いなる楽器となりて今日を奏でつ

奨励賞

前田　美樹（六甲）

1992年生まれ
加古川市在住
「六甲」所属
2017年兵庫短歌賞新人賞受賞
2017年明石市文芸祭市長賞受賞
趣味　旅行

あかりを垂らして

・幸せのまんなかにゐる筈なのに心は時をり雨漏りをする
・紋黄蝶の鱗粉揺れるティーポット魔法はすぐにとけてしまへり
・体温の高い腕は生まれたての猫に触れるごとわたしを包む
・飛べる蟻と飛べない蟻のあることを湯船の海で考へてゐる
・何もかも充たされてゐるやうに眠る君繋いだ五指をそつと解けり
・スウェットと体の境に潜り込む冷たい風をさみしいと呼ぶ
・まだ誰のものでもあらぬ黒髪を撫でやるやうに洗ひゐる朝
・後朝の文のやうなり別れきて五分後にとどく無事についてる？
・うらやましいことかもしれないタオルにはタオルのための定位置ありて
・プロポーズ　されないと検索してみれば雄弁になる恋愛コラム
・君とゐたい君を忘れたい君とゐたい寝返りの数の葛藤がある
・婚活をしながら待ちなよ　湯を注ぎ開かせてゆく茉莉花のまぶた
・背を撫でる手はメトロノーム45どうしても君ぢやなければだめだ
・午後八時君の手握つて指先から融解してゆけスーツもろとも
・鳴かぬなら代りに鳴かう不如帰わたしと結婚してみませんか
・絵本なら最後の頁かモザイクのガス燈通りは今宵もまばゆい
・鼻の先くつつけあつて眠つても二酸化炭素で窒息しない
・雨の夜のコンクリートは水彩画まちと車のあかりを垂らして
・non-noよりESSEが先に目に入る細胞早くも変はりゆく春
・死装束ではなくあなた色でもなくこの白ふたりのキャンバスであれ

奨励賞

藤本　潮子（水甕）

1949年生まれ
芦屋市在住
藤井幸子氏に師事
2010年「水甕」入会
趣味　植物観察

耳鳴りのごとし

・ケサランパサランそれは妖怪しろがねの綿毛を降らせ道を隠せり
・吾に合わせて歩み遅らせくれし路に逸れたるあなたを探さんとする
・滑らかなアビシニアンを膝に抱き君を想えば耳鳴りのごとし
・さりさりと落葉乾ける季ながら足裏に貼りつく悔を踏みしむ
・あたまポンとたたきくれしよ濁として流れ去りたる記憶の先に
・匙に盛る執着深きこころにてインドスパイス濃きミルクティー
・シクラメンの果実熟れゆく待つことの失われたる部屋の静寂に
・置き去りにされると識らずこれの世に昼の月見る昼咲月見草
・暮れなずむ臨港線にアベリアと下弦の月は香りを競う
・夫恋うる顔とは今しこんな顔スクランブル交差点渡るときのま
・降り止まぬ雨の近江の地蔵川水面の奥よりひらく梅花藻
・長き尾をぽとりぽとりと夜の淵に振

る猫われかも十六夜の月
・人想うふたつ指もて蚕豆の剥かれゆきたりころんとひとり
・椎の実は椎の木下に散り敷いて待たず待たれずしぶく秋雨
・何をしているのですかと問いくれず小鳥を待っていますと言えず
・山桃の数多こぼるる公園の奥処に集う鳥たちに逢いに
・尾を立ててけものが部屋をめぐる夜短き手紙を亡き人に書く
・逝く夏を門扉に咲き継ぐクレマチス忘れえぬゆえ思い出さず
・ひさしぶり金黒羽白（きんくろはじろ）　君とこそ交わしたき言葉ああ流れゆく
・ケサランパサランほこりを食べてふわふわと生きたし虚空に両手を拡ぐ

奨励賞

澁谷　義人（塔）

1960年生まれ
豊岡市在住
2001年「塔」入会、地元の「北極星」「弘道短歌会」でも活動
三十一文字コンテスト歌垣賞受賞
歌集『アジア放浪』

酔い果てて

・父と子が同居のゆえに施設には入れませんとケアマネの言う
・一升の焼酎二日で飲み干して病に勝てぬと父愚痴を吐く
・聞こえぬをまるで私のせいのごと父は怒りぬ二人になれば
・母親の遺せしポータブルトイレ父はまたいで演歌を歌う
・突然に父問うてくる　わが妻はまだ京都かとテレビを消して
・いつになく寡黙な父のその横に粗相を見つける出勤の前
・契約の二重を知りたり十年間父は気づかず払っていたのだ
・散髪をすれば肌つや褒められて二月ぶりに父まんざらでなし
・酔い果ててガラス戸倒し階段の下で苦しむ父を見つける
・散らかった下着押しやり救命士は父を担架に強く括りぬ
・叩いたらあかんと父に三度言い看護師二人に頭を下げる
・精神を抑える薬を入れました　被害の看護師われに真向い
・入所して穏やかならば延命もありかと思う　雪の年越し
・監獄より少しましだと叔父叔母に父大声で話し笑いぬ
・ズボン五本ポロシャツ十枚本当にこんなに要るのか施設を移るに
・新品のセーター二枚に油性にて父の名書けば滲み広がる
・二カ月で四ケ所目なら父親はここはどこかと問うこともない
・老健はインフルエンザの流行で面会せぬまま着替えを渡す
・開墾のことに及べば年月を違えず父は饒舌となる
・主なき母屋の庭に名も知らぬ白い花咲く一面低く

特別賞

矢野　義信（短歌人）

1947年生まれ
三木市在住
「ちぬの海」を経て「短歌人」入会
短歌歴十年
2014年神戸新聞年間賞受賞
「尾崎まゆみの短歌教室」4年在籍
趣味　カラオケ

夏の蔓

・狭き部屋に子はひねもす籠りをりいさかひて猛き声あげしは昨夜
・自画像を見る思ひして忸怩たり怒れる子の貌われに似たれば
・子を持たぬ子はいつまでも子のままか我を睨みて勤めにゆけり
・しばしばも暗き顔して帰宅せり教師のむすめ十時を過ぎて
・延々とメールを交はす妻と子よ二階と一階面と向かはず
・わだかまり解けぬままはや師走なり若枝の梅の葉紅きままにて
・伸びすぎて宙を漂ふ夏の蔓我のむすめのごとくありたり
・こんな家出て行つてやると言ひし子が今も居りわれの遺伝子継ぎて
・まがりなりにも三人家族黙しても二酸化炭素増しゆくばかり
・茄子ほどには勝手に育たぬ子育てよ巣立つころありし就職氷河期
・口きかぬむすめの顔をふとみれば哀しき眼をしてわれを見返しぬ

特別賞

奥田　光子（青山歌会）

1924年生まれ
女学校時代より短歌に親しみ短歌を自己認識の為の友とする。のちに近藤芳美に紹介され三宅霧子に師事　豊中市在住
1984年「群帆」入会。　2009年「青山」入会

生きぬる

・育ちゆく曾孫の呉れし人生の特等席とはちよつぴり温い
・嘘つかぬ信条さへや呆け進み自前のうそがするりと滑る
・急死せし子の声残る留守電にかすか流るる夜のノクターン
・色ごろも二日つづきの夢の君よきこと薫るや令和の春は
・秋分の子の三回忌洩れてくるサックスの音はわれにも供養
・売布の森みどりの風と光連れ背を押しくれき子の手温かり
・視野狭きわが眼裏に紫の星ぼし湧けり銀河迫り来
・心臓が早鐘を打ち遠退ける意識の向かうに生きぬるわたし
・息出来ぬ手足しびるる苦のときを斯くありしかと子の終おもほゆ
・撮り溜めし曾孫の写真のカレンダー夫婦の愛の活火山噴く
・わが生もいづれ微粒子而して宇宙循環の活力たらむ

令和元年度「兵庫短歌賞」選考経過
常識を排除

藤岡成子

令和2年3月18日生田神社兵庫の宮で、選考委員出席のもと「兵庫短歌賞」の選考会を開催。応募数は、一般公募作品33、ノミネートされた人の作品12、総数45。選考方法は、各委員が1位に推す作品に10点、2位に9点、以下10位まで点数化。前以て事務担当者に送りこれを第一次選考。その選考結果を踏まえ、第2次審議に臨んだ。

まず、総合得点45点の「あかりを垂らして」と、39点の「樹木の言葉」を真摯に忌憚なき討議をした結果、最終的に選考3名が1位に推している重さが決め手となり、「樹木の言葉」が「兵庫短歌賞」。「新人賞」は検討の結果なしに。受賞作品についての各委員の選評の概略は、左記の通り。

・兵庫短歌賞

樹木の言葉　藤本美智子

目に見えている自然の中に違うリアリティーを感じる。自然を詠みながら、その向こうの永遠を詠い、破綻がなく細かく見ていて、詩の中に誘い込む。一方、目のつけどころはいいが、表現の仕方が古く、もう一歩体感がほしい。擬人化が溶け込んでないとの指摘もあった。

・奨励賞

あかりを垂らして　前田美樹

揺れ動く気持を覗くように丁寧に詠み、古語の取り入れ方も成功している。その時でないと詠めない内気な恋が描かれていて品がある反面、どこかで見たフレーズが目立つ。恋心を直球で押しつけられると疲れるとの発言も。

・奨励賞

耳鳴りのごとし　藤本潮子

自分の気持に距離感を持って詠っていて、幻想性が折り込まれている。劇的なシーンを出さず日常詠とし、よくある形をはみ出ている一方、淡白すぎるので深みがない。恋の思いが読み取れない。「暮れなづむ」時に「下弦の月」は出ないとの指摘もあった。

・奨励賞

酔い果てて　澁谷義人

自己抑制の効いた一連。現在の福祉の現状と絡めて詠んであり、衒いがなく、人真似でない自分だけの歌になっている。ドラマ仕立てで場面が見えるなど好評の反面、ことがらを追っていて、ぎこちなさが。なんでもない叙景歌を少し加えたらの意見もあった。

・特別賞

夏の蔓　矢野義信

生々しいがバランス感覚がよく迫力がある。歌は救いを求める手段、訴えたいことを言葉に乗せていてインパクトがある一方、思い入れがあるのはわかるが、強すぎて空回りしている。立ち位置が傍観者的。三句切れが多用されパターン化しているとの指摘も。

・特別賞

生きぬる　奥田光子

あっけらかんとしていて、人生を超越した諧謔的な大人のユーモア。随所に急死した子に思いを馳せる情の歌を絡め、構成がしっかりしている。反面、助詞の欠落が気になる。作者は96歳。年齢を感じさせない力作で勇気を得た。

他に「花いちもんめ」「飛行機雲」「智恵子のあぢさゐ」「老いの道程」が選考過程で、熱く討議された。今回は29歳から102歳までの応募があり、充実した選考会であった。

選考委員
安藤直彦・岩尾淳子
尾崎まゆみ・桂　保子
小林幹也・中川　昭
藤岡成子・藤本朋世

事務担当
鈴木裕子・藤本美智子
山田　文

兵庫短歌賞全応募者(到着順・敬称略)
(公募・ノミネート)
藤本太子・大江美典・上村武男・臼井てる子・澁谷義人・上田福男・宮崎　浩・矢野義信・奥田光子・吉永明代・中山敬子・地頭所禎子・髙山葉月・遠藤瑛子・飯田　進・藤本潮子・大西弘子・岸本万由美・岩田美代子・藤本美智子・南都　勝・木下加代子・藤原暁美・石飛俊郎・遠藤和子・杉村芳美・上月昭弘・小林まや・岸本　瞳・岩井隆子・老月良一・立岩康彦・吉田千代美・森田　繁・森嶋郁子・西村節子・前田美樹・石原智秋・佐竹京子・渡辺啓子・福山裕恵・齊賀万智・西村　徹・清水昭男・吉田友里子 (45名)

芦屋水甕短歌会

歌会　第2土曜日　13:30～16:00
(芦屋市民センター)
第4日曜日　10:00～12:00
(神戸市勤労会館)

・連絡先 〒663-8123 西宮市小松東町2-1-3-401
☎(0798)43-6820
加藤直美方
・事務局 〒659-0042 芦屋市緑町1-16-102
藤本潮子方

明石大門短歌会

野瀬　昭二

明石市立勤労福祉会館
毎月第三土曜日

連絡先
〒673-0011 明石市西明石町四-七-二十一
☎(〇七八)九二七-四四三九
伊藤敦子

明石短歌会

明石公園内会議室
毎月第一金曜日
第三火曜日

連絡先
〒673-0845 明石市太寺四ノ一ノ三〇
☎(〇七八)九一二-二六七三
田岡弘子

淡路歌人クラブ

顧　問　荒浜悦子
来田　務
代表・事務局長　清水昭男
副代表　島田英樹
会　計　亀井良子

〒656-0651　南あわじ市伊加利1062
TEL・FAX (0799)39-0835
清水昭男

令和元年度

兵庫のうた　秀歌抄　『年刊歌集第59集』より

はじめに

桂　保子

昨秋の『年刊歌集第59集』には241名のそれぞれの歌の世界が紡がれています。短歌という詩型を選んだ者にとって、自分の感動がきちんと読者に手渡し得た時の喜びには大きなものがありますが、これがなかなか難しい。

今、当クラブにも高齢化の波が押し寄せています。歌稿を集める役を担当した者としての実感です。筆圧弱い歌稿、十首に足りない原稿、漢字の選択ミスや文法間違い等、お電話してお聞きするしかない場合も数多ありました。でも、お声を聞くなかで皆さんが歌に如何に情熱を注いでおられるか、感動でした。「詠う」ことは「訴える」が語源とか。各頁に241人の心の一瞬一瞬が刻まれています。刺激を受け合って、自己の歌の世界が深まる一助にこの年刊歌集がなり得ればと願っています。今回の以下の企画もどうぞお役立てください。

兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞受賞者（五十音順）が選んだ「わが注目した歌一首」

一海　美根選

ひびわれた終電の小田急線でどうして鳩を抱きしめている　森永　理恵

就活の一連と読めるが、働く人の歌とも読める現代をとらえた一首。「鳩を抱きしめている」の比喩が秀逸。

大江　美典選

かの指の冷たさふいに蘇る秋のはじめの朝の陽だまり　一海　美根

扇情的な美しい指を思った。温度や感触。そういったものばかりが心に残る。

菅原　艶子選

吾が成し得しことと成したきこと思ひ春日煌めく湖面を見つむ　尼子　勝義

煌めく湖面に初句の達成感と成したきことへの心情が巧みに詠まれた一首。

西塚　洋子選

帰り来て脱げば男の一日は私小説よりもさみしかりけり　中川　昭

鶴と同化した作者。心情を吐露する言葉に心をひかれた。深いものを感じた。

藤本　朋世選

首のべて鶴も劫（かふ）の水をのむ渇（かつ）うるもののさまは尊し　中川　昭

歌はまた「永遠」を尋ねる方便である。切々毅然と自他に呼びかける歌びと。

前田　美樹選

人生の句点のやうにひつそりと床に落ちたる錠剤ひとつ　たなかみち

人生の句点のような錠剤、私もこんな比喩を歌えるようになりたいです。

矢野　一代選

海色のポロシャツ脱ぎて柿色が少し派手です十月の夫　福井　恭子

「少し派手」と言いながらも柿色のシャツ姿のご主人に満更でもない作者。

山中　洋子選

シロメダカ水面にあり美しき劣勢遺伝の陽を浴びており　森垣　岳

愛しく哀しいシロメダカの透明感ある抒情に、劣勢遺伝の語が響く。

年功の味わい（『年刊歌集第59集』二頁～七頁）

安藤　直彦

丹精し守りし山なみ輝きて森なす故郷未来へつながん　井戸　敏三

井戸知事さんの故郷は西播磨、新宮。「未来へつながん」は知事というお立場ならではの表現。今日、荒れ壊れていく自然に向けてのご意思が有難い。

味爽を「ほうほう」と呼ぶ梟に「ほうほう」応ふ　慣となりて　石橋　妙子

この十首は、昨夏、ご逝去された石橋さんの最期のお歌の一連となろうか。底荷に浪漫性を保たれた最晩年のお姿が自然体で伺われて慕わしい。

人去りしのちの温みに身を置きてしばらくののち夕は来りぬ　小畑　庸子

写実・写生の伝統短歌性、その象徴性を生む在り方を徹し来られた小畑さん、この平明なお歌の、下の句の表現にもそれがよく現れている。

齋藤史がねむる石のへ風なきにいづくからかをりをり花びら流る　楠田　立身

齋藤史は楠田さんのご師匠。その長野のお墓に参られての作か。「をりをり花びら流る」には、掛け替えもなく深い絆が髣髴とかもされている。

わが歳を問ひ朝鮮のはらからを明かして泣きき慰安婦少女は　野瀬　昭二

九三歳の野瀬さんは十六、七歳で戦事体験をされたことになる。慰安婦の「少女」を前に、情厚い野瀬さんは何もせず身の内の話をなさったようだ。

皇妃らはデコルテ脱ぎておはす頃かヤレヤレなどと宣はざらむか　藤井　幸子

藤井さんのお歌の領域は広く、令和改元の皇室行事などにも目が注がれる。この場合、寛ぎの時の想像が面白い。それは敬語が働いているからであろう。

魅力はさまざまに（八頁～四十頁）

新屋　修一

①水は水の言葉に語り流れより流れに入りぬかすかの響き　青田　綾子

②待て待てと追つてほしくて湯上がりのはだかん坊が手を擦り抜ける　秋本　多恵

③物干しに物干し竿をくくりつけがんじがらめにするムベの蔓　足立　晶子
④また一軒取り壊される新緑の村につばめの飛び交いており　足立　勝歳
⑤鰹木に陽はさしながら降る雨に遠くはたたのかみは鳴るなる　安藤　直彦
⑥あいたくちふさがらないかあいたくちふさがらなくてウツボカズラは　飯田　進
⑦赤白に今日より黒も混じりたり金魚六匹触れ合はず生く　生田よしえ
⑧悠久の微笑を浮かべアルバムの妻はこれより老いることなし　石田　昭政
⑨ぴゆうぽんとまた飛魚とんだまた一つぴゆうぽんぽんと裏日本海　石飛　俊郎
⑩結び目は緩くしておくいつだってあなたが取りに戻れるやうに　一海　美根

①「水は」と「水の」、「流れより」と「流れに」が響き合ってリズムが心地よい。②「子」「孫」ではなく「はだかん坊」と言ったことで読者に身近な歌となった。③物干しが使いづらいだろうが、作者はそれを楽しんでいるようでもある。④変わってしまったものと、まだ変わらないものとがうまく対比されている。⑤日照り雨の情景がよく見えてくる。「鰹木」という専門的な言葉が一首を新鮮にしている。⑥ウツボカズラを前にぽっかり口を開けている作者が見えるようで面白い。⑦色の違いは性格や立場の違いのようでもあり、寂しい個を表しているようでもある。⑧今はなき奥様への変わらぬお気持が伝わってくる。⑨「ぴゆうぽん」「ぴゆうぽんぽん」のオノマトペがリズムよく心地よい。⑩「結び目」という隠喩が一首の解釈を自由にしてくれて楽しい。

深くこころを詠う十首（四十一頁～七十三頁）

伊藤　敦子

図書館にねむる人あり本棚の本のどこかにいい国がある　岩尾　淳子

静寂な雰囲気の図書館の本棚の本を不思議な空間として捉えていて魅力的。

五人いた頃と変らぬ椅子にいていつしか慣れた独りの夕餉　岩田美代子

四脚の椅子に誰も座っていない独りの夕餉、淋しさが静かに伝わってくる。

夕顔のつぼみのひとつ開きかね触れてうながすゆふべの庭に　浮田　伸子

開花を促すやさしい仕種に花への愛情がこもる。ひらがなが効果的である。

メタセコイアの梢にとまる鴉一羽われの知らざる秋を見ている　内山　嗣隆

大樹のメタセコイアの梢の鴉を見て視界の広がりを感じさせる結句がよい。

楽曲の録音中に帰り来し夫の「ただいま」テープに遺る　大塚　照美

先立たれた夫君の声を偶然遺すことができ、その切なさが胸を打つ。

鯛焼きは熱あつ食べし夫なりき焼きたて供ふ雨降りの午後　大西よしこ

雨降りならば焼きたての香りが一層たちこめ夫君に想いが届くであろう。

川霧が揖保川の流れの大曲りに沿ひてゆつたりたなびく夕べ　岡本　光代

揖保川にたなびく川霧の様を詩情ゆたかに詠いあげ川への思慕が込もる。

地下鉄へ螺旋階段おりてゆく深いふかい記憶のなかへ　尾崎まゆみ

パリの地下鉄であろう。階段を深く降りゆき未知の世界へ吸い込まれていくような心情を巧みに表現されている。

曰ざかりの庭の影濃しとうとろりこの世にありてわれは眠りぬ　小野はつね

上句から陰鬱な眠りの世界にひきこまれ「とうとろり」と深みに沈んでいく様をリズム感よく詠みこんでいる。「とうとろり」が生きている。

変はらないものを包みて変はりゆく故郷に母は小さくなりゆく　加藤　直美

離れていても常に母君をおもい続け気遣う心をさり気なく詠んでいる。

如何に如何に（七十四頁～百六頁）

福島　妙子

スクリューの作りし波のほぐれゆき無かつたことにしてゐる海面　上條とみ子

ひと際激しい白波その消えるまでの時間軸に作者の心情が読みとれます。視線の水面は広い海のほんのひとところ想像を広げる。

前山の奥より降りくるカナカナの声にやわらぐ今日のいざこざ　神山やよひ

静寂な自然に身を委ね一日の暮れる。度量が大きい方と。「に」が効いている。

清めたる夫の墓処に千両の赫き実映えて何がなうれし　岸本しげ子

墓所を清めた後の心地よさが伝わり、赤い実一つ一つをご主人の声と聴く。

普天間にずらりと並ぶオスプレイ地面に刺さる手裏剣のごと　岸本　瞳

俯瞰視点の社会詠。鉄の塊の黒く尖った物体の不気味な映像が読みとれます。

台風の豪雨の爪痕思いつつ静かに今宵の食器を洗う　木下加代子

夕食の洗い物の出来る幸せ、水害で器の無い食事の人々へ心を寄せる。

ソーサーに匙を置く音きこえいて淋しき秋のときをいかしむ　楠田智佐美

時は見えない空間を持つ、匙の置く音であらわれる現。私達は有限なる時を生きていくことを確認する。

さるすべり炎天にひらく形にて暗くよぢれる臓物もつわれら　楠　誓英

真っ赤な百日紅の色彩からの心象詠　動物は五臓六腑を秘蔵。漢字とひらがなが結句臓物を生かしている。下句の転換に感服。

かみ合わぬ夫との会話つきつめず　胸のつかえをほどく白百合　黒川　明子

夫との空気感の常日に共感する一首。息抜きの愛でる白百合は母性の女神。

かがんぼが窓のガラスに飛んでいる四月の六日平和な日本　小谷　博泰

頼りなく飛んでいる姿かがんぼを見つめている穏やかな時間が余韻を生みだしている。具体の日は読む人を立ちどまらせている。

乾きたるバケツに落ちる雨滴八分音符のリズムの真昼　後藤　智子

八分音符♪の早いリズム感が風景を儘に呼び込み、明るい雰囲気が若々しい。

小野短歌会

松尾　鹿次

代表　芝本　政宣
副代表　阿尾日出子
会計　藤井　久子

事務局
〒675-1334
小野市大島町六二一一
芝本政宣
☎〇九〇-三八九五-五〇二二

コスモス 加西勉強会

第2木曜日 13:00～　中央公民館
第2金曜日 13:00～　アスティア加西

連絡先
〒675-2365　加西市畑町577
藤岡　成子
☎(0790)42-0415

流派を超えた短歌交流誌
楠田　立身　編集

象 (SHO)

入会歓迎
〒670-0843
姫路市城東町清水13-7-404
楠田方　☎(079)285-1695
短歌ぐるうぷ象の会

海市短歌会

編集発行人　中川　昭

発行所
〒650-0027
神戸市中央区中町通三-一-十五
神戸コーポラス七〇一
☎(〇七八)三七一-〇二三九

神戸支部
〒653-0813
神戸市長田区宮川町
四-八-一-三一三
明石多美子方

コスモス　葛の花

会場　多可町八千代区
八千代プラザ
第2水曜日　午後1時

代表
〒677-0121　多可郡多可町八千代区
花の宮1171
岸本　しげ子
☎(0795)37-0680

白珠

入社費　五〇〇円
社費(六カ月)　六、〇〇〇円
旧号見本　切手　四〇〇円

兵庫県内支社
神戸白珠の会
宝塚白珠の会
加東支社
淡路支社

〒562-0001
箕面市箕面三-五-八
白珠社
代表　安田　純生

但丹歌人(季刊)

発行　但丹歌人会
代表　尾形　貢
編集発行人　中島眞喜子

〒669-5229　朝来市和田山町宮438
☎(079)672-2334

運営委員
足立美津子　飯田　和子　稲葉　節子
衣川由弥子　高橋　博子　中島眞喜子
平野　君枝

コスモス 東加古川勉強会

会場　加古川総合文化センター
第2金曜日　13:00～

連絡先
〒675-0016　加古川市野口町長砂1217
新屋　修一
☎(079)423-5168

薫　風

主幹　長谷川　正

入会金・添削料　不要
月刊・会費　月1,700円

発行所
〒651-0077 神戸市中央区日暮通4丁目1-7
(サニーコート日暮202号)

TEL・FAX (078)221-0023
振替 01160-2-6567 薫風社

丹　生 TANZYO

主張　生活写実を主体として真剣に作歌力を深めようとする集り
創刊　昭和二十一年
代表　兼貞　靖行
〒673-0424　三木市自由が丘本町2-232
☎(0794)83-0803
編集同人　井口通子・林　茂代・藤井貞子・前中　仁・兼貞靖行・上倉佐田子・山中洋子・山本樹一
事務局　〒673-0533 三木市緑ヶ丘町東2-11-5
連絡先　山中洋子方
☎(0794)84-0296
振替口座　00950-9-195197

創刊　宮　柊二

コ　ス　モ　ス

〒181-0001　東京都三鷹市井の頭1-2-17

姫路支部

支部代表　飯田　進
運営委員　矢内　温代　新屋　修一
秋本　多恵　金砺　靖子
連絡先　〒671-2233　姫路市太市中678
飯田　進　☎(079)269-0513

香寺短歌会

代表　岩田百合子
会計　景山　昌乃

連絡先
〒679-2151　姫路市香寺町香呂438
生田　よしえ
☎(079)232-4003

千鳥短歌会

山桜や紅葉に染まる山々。波荒く、また凪ぎる瀬戸の海。渡る千鳥。
取り巻くすべてが歌心を誘う恵まれた環境にある短歌会です。月一回、第二土曜の午後行われる例会は活気に満ち、和気あいあいの楽しい雰囲気です。

代表　山田　恵子
〒656-0426
南あわじ市榎列大榎列七五一-五
☎(〇七九九)四二一-二〇六二

佐用短歌連盟

会長　安藤直彦

グループ代表
竹田幸男　菅原艶子　新家イサ子　尾上節子　船引貴子

[連絡先]　0790(84)0150　新家 イサ子

コスモス藍の会

猪口　昌子　小野久美子　小野はつね
小野　幸恵　久米川孝子　土山　純子
弓岡あき子

〒671-0121
高砂市北浜町牛谷三八八
久米川　孝子

潮音
大正4年創刊

編輯発行人　木村　雅子
〒248-0011　鎌倉市扇谷3-11-4
神戸歌会　三津野　幸代
〒658-0027　神戸市東灘区青木2-2-1-617
TEL　(078)431-8665
幹事　石　進通　婦木　和香
会計　冨田　成子
監査　池本登代子

白圭

編集委員　内海　永子
鎌谷　克子
川上千鶴子
塩澤　文子
首藤　幸子

発行所
〒679-4003　たつの市揖西町小神297-1
内海永子方
白圭社
☎(0791)63-4734

ポトナム姫路支部

(佐用)　新家 イサ子

連絡先
〒671-2247　姫路市緑台1-7-1
羅川　範子

茅花短歌会

短歌文学の鑑賞と作歌についての研修を行い、清新自由で個性に応じた作歌を目指します
毎月第二水曜日九時半よりふれあい交流館で勉強会
季刊誌「茅花」を発刊

講師　沼田　俊郎
代表　前田　昭子
〒675-1113　加古郡稲美町岡一六三〇
TEL FAX (〇七九)四九二一-一七六六

波濤神戸

発行人　保田ひで
発行所　波濤神戸支部
連絡先　〒653-0852
神戸市長田区山下町1-5-15
保田方
☎(078)612-9294

保田　ひで
田渕　知子
富岡　経子

美加志保短歌会

創刊　昭和二十一年十一月

〒675-1304　小野市中谷町一二六七
編集兼発行人　山本　満代
☎(〇七九四)六七-〇八二四

津布良(つぶら)

代表　兎田　孝子
編集員　遠　洋子
阿部ツヤ子

発行所
〒661-0046　尼崎市常松一-一九-二九
TEL FAX (〇六)六四三三-五五三七
松村　和子

東浦短歌会

代表　片山 田佳子
毎月　第2木曜日　13時30分～
歌会
東浦老人福祉センターにて
会費　月　千　円

連絡先
〒656-2311　淡路市久留麻2346-6
片山 田佳子
☎(0799)74-2141

水甕明石支社

左記で、毎月歌会を開いています
お気軽にご参加下さい

◇第一土曜日　午後二時より
◇場　所　コープ朝霧　組合員集会室
◇連絡先　大迫　孝子
〒673-0870　明石市朝霧南町三-十一-九-四〇七
☎(〇七八)九一四-〇七八七

とべら
(月刊)

代表者　尼子　勝義
発行所　赤穂短歌の会
とべら発行所

〒678-0163　赤穂市高雄1876-1
尼子方
☎(0791)48-0137

姫路歌人クラブ

顧問　水野　美子
小畑　庸子
代表　濱田　楠田
副代表　飯田　立身
会計　青田　綾子　進　守
会計監査　首藤　幸子　羅川　内海　永子　範子
事務局　〒671-2224　姫路市青山西四丁目五-六
西村　久代方
☎(〇七九二)二六七-二七六七

水甕姫路

隔月刊「ひめぢ水甕」

編集
生田よしえ　小松カヅ子　藤本　則子
楊井佳代子　伊藤　悦子　安田　玲子
山野　淑子

発行　小畑　庸子
〒679-2131　姫路市香寺町犬飼366
☎079-232-2380

会計　芦田　礼子
〒672-8035　姫路市飾磨区中島1097
☎079-235-6831

西脇短歌会

会長　藤本　勝子
副会長　三村　時枝(事務局)
会計　高瀬満由美

事務局
〒677-0054　西脇市野村町1712
三村　時枝
☎(0795)22-1850

文学圏
郷土に生まれ、郷土が育てた短歌誌
創刊昭和21年

顧問　下村　千里
内山　嗣隆
編集人　青田　綾子
発行人　浮田　伸子
発行所　〒651-2276
神戸市西区春日台1-8-1　浮田方
☎(078)961-5676
編集委員　宮脇　経子・山本　圭子
山本　君子・吉田千代美
吉永久美子
会計　平野　隆子

旅笛(りょてき)

歌は人生の旅路に携える一管の笛

編集　角倉　羊子
黒崎由起子
小笠原明子

旅笛の会
〒178-0064　東京都練馬区南大泉2-23-8　梅村方
角倉　羊子
〒651-0052　神戸市中央区中島通1-1-25-102
黒崎由起子

家族を詠う（百七頁～百四十頁）

石原　智秋

①母に似た手は分厚くて不細工でじゃんけんぽんの強いわれなり　小林　まや
②娘の帰りメールまだかと聞く夫に自分で聞けばと声には出さず　小林留美子
③忖度を知らぬ孫問う会う度に「ばあばの手は何でしわしわ」　近藤　直美
④楽しげに歌うたいいし母なりき卒寿の独り居推しはかる今　塩澤　文子
⑤木の芽和えの筍うまし父あらば温燗ひとつ追加と言わむ　地頭所禎子
⑥春彼岸うからとくれば子の石碑ほの温かし日ざしの満ちて　杉岡　静依
⑦運動会の順番を待つ四歳の孫はバトンに空覗きいる　杉本こま子
⑧グラスさあ掲げませうか向かひ合ふあなたを祝ふことばを添へて　田岡　弘子
⑨提げ来たる子の八重牆（やへがき）のあらくちが賀正の座敷の腑に沁みとほる　高橋亭留子
⑩春霞いまだ深かる明け方をライトをつけて娘は出勤す　多木佳也子

自然詠や時事詠が多い中で、あえて家族の歌を取り出してみた。子や孫の歌はどうしても甘くなってしまうというが、それもまた良し、である。

①母と同じ手はじゃんけんぽんに強い。ユニークな表現、具体が魅力的。②奔放な娘と心配性の夫、家族の心理や作者の心情が伝わってくる。③忖度を知らぬ孫の言葉は単純明快。関西弁が楽しい。④九十歳になっても一人居だった母の胸の内。年が近くになった今、漸くわかったと言う。⑤健康な日々に感謝しつつ、木の芽和えが好きだった父を振り返る。⑥子の眠る石碑の下もほの温かいと安堵する。子どもを想う心情が痛いほどわかる。⑦上句、やや説明調になったが、バトンで空を覗くという孫への驚きの瞬間を切り取った。⑧あなたを祝うことばを添えてグラスを掲げ乾杯。素敵な夜の光景が浮かぶ。⑨具体を詠みこむことで、正月に帰省した息子へのうれしさが滲み出ている。⑩静かな描写の中に娘を案じながら見送る作者が浮き上がる。「を」の重なりが気になる。

言葉の力（百四十一頁～百七十四頁）

山田　文

①芽吹かんと梢ゆるめているらしきグーチョキパーっと山笑う待つ　谷池さなえ
②福ひとつこぼしてゆきぬ鵯か初雪の庭に赤き円ら実　知地　一代
③侵し得ぬ白の深さのけだかさを遠葦原の鶴に見てゐる　中川　昭
④つくばひのみなもにうつるごくじやうの月は月齢十六・二　中村　京
⑤ふうわりとわが家の横を蛍飛び光りて消えて点線を引く　中山みよ子
⑥しみじみと一頭一頭の顔ながむ　わが歌の祖は牛らにありき　西久保光子
⑦いつの日か一人の旅となることを話したりして二人で歩く　西塚　洋子
⑧風が息してゐるらしきひとところ舞ひゐる鳶の羽が傾く　濱　守
⑨身心のあやふきつりあひ引つ提げて歩調もたつく退院の途　林　二子
⑩さびゆける楓もみぢを透く冷えに心頼りのいづへあるべき　廣庭由利子

①「梢ゆるめて」「…パーっと」に言葉の工夫があり、待ち遠しさが溢れる。②鳥は福（餌）である実をこぼし、作者に美しい景を福として与えた。「福」が要（かなめ）。③人は裡に「侵し得ぬ白」を保ち続けることができるのだろうか。考えさせられる。④この見事な月は満月かと新聞で確認されたのでは。そんな想像をも生む「十六・二」。⑤やさしい言葉を綴りながら、核である「点線」へと繋ぐ。構成が良い。⑥共に歩んできた牛達への愛おしさを「歌の祖」の視点から詠う。正にしみじみとした味のある歌。⑦何気ない光景のような淡淡とした叙述に、この世の厳しい真実が内包される。⑧滑翔する鳶が気流の変化をうけたのであろう。上句が何とも魅力的。⑨入院生活から日常への境目。身心の不安定感を表す「あやふきつりあひ」「もたつく」が絶妙。⑩寒々しい季節を迎える頃、ふっと兆す心細さ。一句一句の磨かれた表現に強く惹かれる。

こころにひびく歌十首（百七十五頁～二百八頁）

吉田千代美

曼殊沙華の首をつぎつぎ切りながら下校する児よ　雨が降りさう　藤岡　成子
不満や淋しさを抱えている児か。見ている作者の哀しさが結句に出ている。

陽を浴びて色あたらしき石蕗の花かかる応（いら）へのこの身にありや　藤本　朋世
日差しに応えて咲く花。受けた恩に応えているかと自身に問う。

川風に吹かれてをれば空つぽのうつはとならむ　風とほりゆく　藤本美智子
「空つぽのうつは」に詩情がある。透明感が気持いい。

家具に身を預けてズボンを穿きて脱ぐわれは確かな老耄れ盛り　藤本　幸雄
「老耄れ盛り」が「生意気盛り」を連想させて新鮮。ユーモアがある。

まだわずかわれにとどまる音色あり奥津城までのながき石階　本田　勝彦
どんな音色だろうと想像力をくすぐる。ロマンを感じさせる。

半夏生の片白の葉の涼しさよ忘れてよいこと増えてゆくなり　牧野　秀子
上の句と下の句がよく響きあっていて納得。「片白の葉」が効いている。

虫の声風鈴の音も聴き取れぬ耳を撫でゆく初秋の風　松田　辰子
耳が聴こえにくくなっても嘆かず、耳を撫でゆく風に焦点をあてて詠まれた。

歩みゆく子のランドセルかたかたと野の陽炎の揺らぎを囃す　水田三和子
ランドセルの歌はよくあるが「陽炎の揺らぎを囃す」という捉え方がいい。

月一度の出逢いを止めて身がるでも時にふいっと甦えるもの　水谷　英子
たとえば月一度の歌会。止めたら時に淋しく、なつかしく甦えるだろう。だ

れにでもある気持ちの機微を上手に表現された。ベンチよりはみ出す吾の影ノックして杖つく二人の若やげる声　三津野幸代

「吾の影ノックして」と捉える感性が若々しい。杖つく二人も楽しそう。

三十一文字（二百九頁～二百四十二頁）

藤本　則子

①真裸で積みあげられたる戦友の屍置き場にやり場なく居つ　南　裕之
②お家でも学校でもない保健室の窓に揺れゐるしろきあぢさゐ　宮城　十子
③眠る子は重し　大きな空想が子の内側に流れ込むゆえ　森垣　岳
④雨の日の木蓮　そんな顔をしてまぶたの裏に立ち尽くすなよ　森永　理恵
⑤折りたたむ傘の骨よりしたたるは今日の仕事のしくじりの澱　矢野　一代
⑥核兵器禁止条約不署名の日本であること忘れていたり　山田　文
⑦自己主張はじまるのだらう少年は逆三角に肩広げゆく　山本みさよ
⑧紅々と地表に散り敷く萩の花掃きよす箒に重みのありて　吉永久美子
⑨かつぽんと折りてかじりて谷へ投げ　むかしの子らのイタドリ遊び　吉野　節子
⑩辛い時　十首も詠めば和みたり　ながき絆の三十一文字　吉村すゑ子

①「追憶のファイル」と題しシベリアでの戦争体験を詠んだ十首中の一首。戦後七十五年戦争を語る人も少なくなった。身を削るようなモノローグで貴重な作品である。②保健室を「お家でも学校でもない」と言い多感な児童の心の安らぐ場となっていることを表し、しろきあぢさゐが印象的。③初句は体感、二句以下は主観で表し、父親の大きな愛と希望を感じさせる。④「まぶたの裏に立ちつくす」のは木蓮、人なのか、ストレートな表現にインパクトがある。⑤傘のしずくを描写しながら自を顧みるおもいを表し印象深い一首である。⑥唯一の被爆国である日本が核兵器禁止条約に署名していないということに対する思いを、自分に引き付け「忘れていたり」と表し深いものを読者に投げかけている。⑦下句の描写は反抗期にさしかかった少年の姿を的確に捉え愛情を感じさせる。⑧「箒に重みのありて」の把握に繊細な感性を思わせ詩性がある。⑨イタドリに郷愁を覚え「かつぽん」のオノマトペアがおもしろく酸っぱさが広がる。⑩「辛い時十首も詠めば和みたり」に心をうたれた。

心惹かれた「情景」

保田　ひで

ヒマラヤのうす紅色の塩を置き何か愉しい朝の食卓　内海　永子

うす紅色が効いた歌。ヒマラヤの塩が朝の食卓をさわやかに彩ってくれた。

日没の後も明るき西の空ちちははのなきこの世を生きる　楠田智佐美

日没の後も明るい残照の彼方に在すちちはは、在さぬ現世を生きる私。

黄揚羽が私のまわりを飛びまわる私は若葉の色のセーター　小谷　博泰

メルヘンチックな風景が目にみえるよう。蝶と若葉の色彩が美しい。

静かにと言っても虫は泣きやまずまっ赤に沈む秋の夕陽よ　芝本　政宣

虫が鳴きやまずでなく泣きやまずであることに注目、秋の落日の凄絶。

帰り来て脱げば男の一日は私小説よりもさみしかりけり　中川　昭

大先輩の歌に評はおこがましいけれど下句「私小説よりも…」に絶句。

半夏生の片白の葉の涼しさよ忘れてよいこと増えてゆくなり　牧野　秀子

片白の葉の涼しさに比べて年を重ね忘れてもよい多くのもろもろを詠嘆。

雪洞の灯りに花びら舞い散りて今宵あるらし風の婚礼　黒崎由起子

舞い散る花びらを見て「風の婚礼」をイメージされた雅びに心惹かれる。

今日も明日も定刻走る路線バス寄り道したい時もあろうに　鈴木　裕子

定刻定コースの路線バスを擬人化した発想のおもしろさ、ユニークさ。

いつの日か一人の旅となることを話したりして二人で歩く　西塚　洋子

淡々としていつの日か…のことも話すお二人、共にある今のいとおしさ。

独り居が居間に設けしぬくぬくの炬燵はどこより入るも自由　久米川孝子

誰にも束縛されない「自由」、作者の心もぬくぬくとあたたかい。

人生の機微を感じる歌

廣庭由利子

・合併に合併を重ね令和の世に生き残りたる社名の長し　阿部　綾子

銀行の合併は経済と世の中の移り変りを実感させられる。

・深酒に酔ひ終戦日の深夜　夫は特攻の友呼びて哭く　荒浜　悦子

戦争の惨めさが心にぐさりと突きささる一首である。

・もつれたる糸を諦めずにほどく今はいとまも根気もありて　糸田冨美代

八十才を迎え穏やかに過去にも現実にも向かい合う姿が美しい。

・絡みつくしがらみの糸ほぐれゆき余白を満たす家族・友・歌　神山やよひ

良き人生を歩み来て、現在の満たされた温もりを感じる。

・夢にきて疲れが取れぬと友言いき逝きにし友は同い歳なり　木下加代子

ドキリとした。友の人生はどうだったのか。遣る瀬なさを巧みに詠っている。

・食後の薬飲んだかまあいいか飲んだ気すれど　死にはするまい　上月　昭弘

諧謔の歌は難しいが、この歌は好感が持てる。誰もが思い当たること。

・洗い張りは吊橋おもわす新緑の庭に吊りゆく母の夢見き　地頭所禎子

洗い張りを若者は知らないだろう。正に吊橋。造形美術のようであった。

・山頭火の「まっすぐな道でさびしい」が漸うわかるわれに秋きて　知地　一代

山頭火には人の心を撫でるような句が多い。しみじみとした一首。

・千年のけふ一じつを鳴く鶴のこゑもみじかし雪の切れ間に　中川　昭

静謐な日本画のような気品がある。千年生きるという鶴の声がかなしい。

・支給さるる手当を長子の命だとつつしみ使いし亡母のたちくる　中道キミ子
悲痛な真実をさらりと詠んだところに痛烈な反戦のメッセージがある。

地名や固有名詞の力

芝本　政宣

①そりやぁあなたの齢にわれも達したり史の享年には十余年　楠田　立身
「そりやぁあなた」で歌人斎藤史が蘇える。
②アンボンの浅き井戸にて洗ひたる頸汗すれば症づる掻痒　野瀬　昭二
戦争の傷が「アンボン」「掻痒」という具体で読者に突き付けられる。
③現実のわたくしなんぞくそくらえあかい舌だすペコちゃん人形　飯田　進
ペコちゃん人形が、あっけらかんと開き直る生き方を教えてくれる。
④ニケに逢うための翼をひろげつつ階段をのぼるときのときめき　尾崎まゆみ
ルーヴル美術館の「サモトラケのニケ」を見る高揚が見事に表現されている。
⑤西日笠北高御位山に抱かれし我が故郷の春日は豊か　岸野　和夫
故郷の地名が歌いこまれ、堂々としていて心に響く。
⑥突然のGoogleからのHappy Birthdayいつの間にやらさういふ仲に　岸本　瞳
Googleは私のことを知っている。IT時代の今を現わして面白い。
⑦商人のやさしさそしてそつけなさ長浜育ちの女と別れる　小林　幹也
軽妙洒脱。湿り気を帯びないエロスに地名が生きている。
⑧口重き子と剣菱を酌む夜のゴーヤの和え物ほのかに苦し　髙井　忠明
「口重き子」「剣菱」「ゴーヤ」の組合せで人生の苦さと喜びが伝わる。
⑨一日にて植田となりし印南野をお疲れさまと風の吹きゆく　前田　昭子
機械化された田植。「お疲れさま」が効いていて印南野の心地良い風が届く。
⑩フランク永井死にて十年「公園の手品師」うたふ人もなき秋　矢野　義信
往年の名歌手フランク永井。もはや忘れられたか。「秋」が効果的である。

独自の発想と視点に惹かれて

黒崎由起子

玉藻刈る敏馬に震災忌は巡り蒼さ研ぎゆく空とこころと　藤井　幸子
震災に失ったものへの鎮魂に冴える空の蒼、初句がたゆたう時を連れてくる。
ゆゆらゆらゆらゆらゆらふんはりと風が見えたりシーツの端に　太田冨美惠
「ゆ」の重なりに風の柔らかさだけではなくシーツの手触りまで見えてくる。
ニケに逢ふための翼をひろげつつ階段をのぼるときのときめき　尾崎まゆみ
作者のときめきがまだ見ぬ女神ニケの翼を想像させる巧みな構成である。
突然のGoogleからのHappy Birthdayいつの間にやらさういふ仲に　岸本　瞳
容易く情報が流れるネット社会への不信感や反発を軽妙な切り口で見せる。
風切羽切られてうかぶ白鳥のまなこにゆがんだ空のあること　楠　誓英
飛べない白鳥の瞳に映る空はあまりにも遠く、失った自由を思うのだろうか。
人生の句点のやうにひつそりと床に落ちたる錠剤ひとつ　たなかみち
錠剤を人生の句点とした比喩から、暮らしに潜む命の厳しさと寂寥感が漂う。
夫のあとすぐに追ひつく気がしてる　ふりむかなくていいのよあなた　西塚　洋子
病む夫への思いは自らの生きる支えでもあり、かけがえのない時が流れる。
あはゆきに息ひそめしごと金平糖ひとつひとつを手のひらに受く　西橋　美保
巧みな比喩に金平糖のひんやりとした感触や透明感・愛らしい彩りが浮かぶ。
シャガールの花嫁空に現われて胸のブーケより消えてゆきたり　待元　明子
雲が描く花嫁像が風に淡く消えてしまう、つかのまの時を捉えて美しい。
雨の日の木蓮　そんな顔をしてまぶたの裏に立ち尽くすなよ　森永　理恵
濡れる木蓮のような「そんな顔」を忘れることのできない哀しみが際立つ。

愛・恋

加藤　直美

①寝返つても寝返つても離れない君の顔が枕に描いてあるのか　安藤　三從
②丁寧に薄皮剥いでゆくやうなあなたの視線　月が崩れる　一海　美根
③居眠れば別れの時なる夫の手を布団の下で堅く握りしむ　上野　和代
④される側と呼ばれる君が車椅子を押して一陣の風となりたり　大江　美典
⑤ニケに逢ふための翼をひろげつつ階段をのぼるときのときめき　尾崎まゆみ
⑥帰り来て旅の思い出ききくれし夫なき部屋に蝉しぐれきく　片山田佳子
⑦恋文に真っ赤なバラの切手貼り早く出さねばもう喜寿がくる　神山やよひ
⑧突然のGoogleからのHappy Birthdayいつの間にやらさういふ仲に　岸本　瞳
⑨肉体を失くしたあなたに触れたくて指でなぞる黄昏の空　黒崎由起子
⑩ひとつ黄の蝶を追ふらし妻の目もデイサービスのバスまちながら　新屋　修一

①「枕に描いてあるのか」が面白い。君の顔が離れないのは恋しいから？それとも…②「薄皮剥いでゆくやうなあなたの視線」官能的な表現が魅力的。③最期の時を布団の下で手を握るという夫婦の究極の愛が心を打つ。④介護される側の君が車椅子を押す様子が清々しく爽やか一首となった。⑤女神の彫像ニケに逢うときめきは恋人に逢うよう。ニケの翼は作者の翼でもある。⑥旅の楽しさと夫なき部屋の寂しさの対照に作者の気持ちが伝わる。⑦「恋文」「真っ赤なバラ」という情熱的な言葉に、「喜寿がくる」のギャップが絶妙。⑧Googleがいつの間にか恋人？現代社会を鋭くユーモラスに詠った。⑨美しい挽歌。もう触れることのできないあなたは黄昏の空に居るよう…。感覚的な表現が秀逸。⑩夫も妻も無言で黄の蝶を目で追う。デイサービスのバス待ちが切ない。

社会・時勢の歌

足立　勝歳

①生き過ぎし我と思いて今日も読む緩み果てたる施政のすがた　井上　美地
②ひまあればスマホをいぢる若者よ平成の指マッチがすれず　桂　日呂志
③超人級の眉つり上ぐるカルロス・ゴーン山茶花咲き初む朝逮捕さる　鎌谷　克子
④普天間にずらりと並ぶオスプレイ地面に刺さる手裏剣のごと　岸本　瞳
⑤隠すべき何かあるのか官僚の国会答弁の保身見苦し　塩澤　文子
⑥いく度も給餌に励むつばめ見て終活セミナーの輪の中にいる　糴川　範子
⑦団塊の世代が老いて農なすも宅地と荒地に景色は変る　田渕　昭弘
⑧認知機能検査に満点取れざれば慎しみて教習車のハンドル握る　中島眞喜子
⑨豪雨禍の追悼式にハンケチの黒を眼に当つ一人の婦人　森　英子
⑩未曾有の地震ありし町行儀よく区画整理のままにべそかく　矢野　一代

平成から令和に元号が変わった。きびしい社会・時勢を表現した歌を選んだ。①「生き過ぎし」に作者の憤りがある。真摯な政治を熱望する。②スマホが広がり、若者が依存している。「マッチ」は過去の用具となった。③ゴーン氏は法を無視して脱出出来る。「眉つり上ぐる」は強烈な表現である。④オスプレイを「手裏剣」に喩えている。飛び回り、着陸する。⑤大臣の発言に合わせる官僚。「保身」に汲々としているように見える。⑥働き続け終活を考える。「つばめ」に作者の過去の生活が暗示されている。⑦昨今、空地、不耕作地が増えている。「団塊の世代」の嘆きが聞こえる。⑧高齢者の事故が目立つ。「慎しみて」に作者の姿勢が分かる。⑨「ハンケチの黒」が印象的。自然災害が頻発し各地で追悼式が行われた。⑩かつての賑わいはない。「べそかく」は街の様子である。

兵庫県歌人クラブ　年刊歌集 第六十集の作品募集案内

作品様式　十首（過去一年間の自作、既発表・未発表問わず）・題を付ける。四百字詰めA4版原稿用紙（21×29・7㎝）二枚を用いて、楷書で明記し、右肩を糊付け。一行目に①題名　②氏名（題名の下に、必ず「ふりがな」を付す）二行目はあけ、三行目から③作品十首　④二枚目末尾に所属結社又は団体名・郵便番号・住所・電話番号を明記

※尚、A4サイズ縦書きでの、パソコン入力可（様式は前述通り）

かな遣い　新・旧いずれかに統一し、歌稿右肩（上部）欄外に新・旧の別を明記

参加料　三千円（歌稿に同封して送金する。切手代用は不可）

資格　問わない（会員・非会員の別なく誰でもご参加いただけます）

締切　令和二年八月二十一日（金）（当日消印有効）

送付先　〒665―0855　宝塚市売布きよしガ丘六の五　桂　保子方
兵庫県歌人クラブ年刊歌集刊行委員会宛　℡〇七九七―八四―八八八一

令和元年度第3回幹事会報告

第3回幹事会（3月30日予定）と神戸短歌祭・総会（4月29日予定）をコロナウイルス感染対策から中止。今年度は会員への書面による報告により、幹事会及び総会に代えさせていただく。

◇令和元年度事業報告

①4月29日（祝日）、県民会館にて神戸短歌祭及び兵庫歌人クラブ総会を開催。「兵庫短歌賞」授与。催しは「現代歌合せ」、判詞真中朋久氏。

②6月3日（月）、神戸市勤労会館にて、ふれあいの祭典兵庫短歌祭設立委員会実施。

③6月24日（月）、「会報」第201号発送。800部。編集、森嶋郁子・藤本朋世・山田文。結社広告38社。兵庫短歌祭作品応募案内・「年刊歌集」作品応募案内を同封。

④10月17日（木）、神戸市勤労会館にて、ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会・作品審査会。併せて第2回幹事会を実施。

⑤11月17日（日）、神戸市勤労会館大ホールにて、ふれあいの祭典兵庫短歌祭開催。入賞者表彰・作品総評。講演は阿木津英氏。「短歌、これまでこれから『折口信夫の女歌論』再考」。参加者130名。

⑥11月25日（月）、『年刊歌集第59集』刊行発送。編集人桂保子。応募総数241篇、350部発行。

⑦12月12日（木）、「会報」第202号発送。編集、森嶋郁子・藤本朋世・山田文。歌会広告44件。発送部数850部。

⑧12月13日（金）、兵庫県文化懇話会に安藤代表出席。

⑨1月　歌人クラブ新年懇親会中止。

⑩3月7～8日予定の伝統文化体験フェスティバル、コロナウイルス関係で中止。

⑪3月18日（水）、生田神社兵庫の宮にて令和元年度兵庫短歌賞選考委員会を実施。※詳細「会報」本号。

令和2年度第1回幹事会（第3回幹事会後）

コロナウイルス関係で中止。議案・役員及び、事務局員・幹事の退任・新任者の確認・承認、新年度の事業計画の検討と役割分担の骨子の審議・確認。

令和2年度総会の書面報告

神戸短歌祭・総会中止に伴い、書面報告を以て総会とし、事業報告・会計報告・新役員新幹事紹介、新年度事業計画は承認・決議されたものとする。

令和2年度幹事

青田綾子・足立晶子・足立勝歳・尼子勝義・安藤直彦・飯田　進・生田よしえ・池本登代子・石原智秋・**一海美根**・伊藤敦子・岩尾淳子・浮田伸子・内海永子・大西よし子・尾崎まゆみ・片山田佳子・桂　保子・加藤直美・黒崎由起子・小林幹也・芝本政宣・島田英樹・清水昭男・新屋修一・鈴木裕子・田岡弘子・中川　昭・中島眞喜子・西橋美保・廣庭由利子・福島妙子・藤岡成子・**藤本潮子**・藤本朋世・藤本則子・船橋貞子・前田昭子・牧野秀子・松田辰子・三津野幸代・森嶋郁子・保田ひで・矢野一代・山田恵子・山田　文・山本圭子・山本みさよ・吉田千代美（※太字新）

地区通信

【神戸】 10月1日、三津野幸代氏、兵庫県放送大学文芸部講師就任。▼11月8日花鏡短歌会はポートピアホテルにて主宰者「石橋妙子お別れの会」を開催、参加者85名。▼11月16日、海市短歌会は神戸産業振興センターにて「本社集会」開催、参加者中川昭、明石多美子両氏他20名。▼11月24日、海市短歌会藪内眞由美氏は日本歌人クラブ奨励賞受賞。▼1月1日、三津野幸代氏、潮音社選者就任。▼12月11日、よみうり文芸落合けい子選に文学圏平山進氏入選。NHK学園に中山みよ子氏入選▼1月9日、文学圏は花の北市民広場にて新年歌会を開催、参加者15名。▼2月10日、文学圏運営委員会にて顧問・下村千里、発行人・浮田伸子、編集委員・青田綾子、会計・平野隆子が再任、新たに内山嗣隆が顧問に就任。▼2月23日、海市短歌会は神戸婦人会館にて矢野一代歌集『まずしき一冬』批評会を開催、参加者、中川昭、黒崎由起子両氏他8名。▼2月25日、花鏡短歌会『石橋妙子追悼集』発行。▼3月1日、花鏡短歌会解散。▼3月3日、NHK学園第6誌上短歌大会に、文学圏上月昭弘氏入選。

（黒崎由起子）

【明石】 11月23日、明石市生涯学習センターにて「第46回明石市文芸祭表彰式」を開催。短歌一般部門の応募数458首、選者楠田立身氏。ジュニア部門の応募数1036首。選者田岡弘子氏。表彰式の後、選者の講評。同日、「明石ペンクラブ通信第20号」を発行。▼11月28日、明石市柿本神社にて「第163回柿本神社秋季献詠祭」を開催。選者楠田立身氏。兼題「明石」、競点題「水」。出詠・祭典参列者、石飛俊郎・伊藤敦子（入選）各氏。▼12月18日、明石城なんでもコンテスト（短歌部門）第3（秋）審査会に田岡弘子・伊藤敦子両氏が参加。

（伊藤敦子）

【姫路】 11月28日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ第30回合同歌会開催。出詠71首。内海永子・小松カヅ子・浮田伸子・青田綾子・生田よしえ・新屋修一各氏他38名出席。

（飯田進）

【東播】 1月8日、茅花短歌会は「茅花誌」第194号を発行。▼2月21日～23日、稲美町ふれあい交流館サークル発表会に短歌会全員の短冊を展示。▼3月1日第2回菅公顕彰短歌祭応募数260首。選者は安藤直彦・楠田立身・田岡弘子の各氏。関東から九州まで県外の応募者多数。開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大のため直前に中止となる。▼4月1日、前田昭子氏は稲美町ふれあい交流館サークル連絡会会長に就任。▼4月8日「茅花誌」第195号を発行。▼高砂歌人クラブの総会にて、鈴木裕子氏が令和2年度の会長に選出される。▼東加古川短歌会は、毎月第2金曜日13時より加古川総合文化センターにて短歌会を開催。連絡先、新屋修一。

（新屋修一）

【中播】 11月7～9日、香寺短歌会は姫路市公民館祭に協賛して短冊出展。▼11月20日、香寺短歌会は60周年記念号「石蕗」第7集発行。▼12月17日、姫路市文化センターにて「公民館の集い」開催。香寺短歌会は短冊出展。▼1月25日、第21回NHK全国短歌大会において吉永明代氏（水甕）佳作。▼1月30日、市川町文化協会は新春短歌会開催。選歌と講評、小畑庸子氏（水甕）。▼2月8日、神河町文化協会は第14回神河町文芸祭開催。選歌と講評、小畑庸子氏（水甕）。

（生田よしえ）

【北播】 1月9、10日アスティアかさいにて第53回加西市文芸祭開催。短歌部門応募数一般の部195首。一般の部市長賞板井ちさ代氏（加西市）、ジュニアの部市長賞川本真優さん（北条小3年）。一般の部の選者桂保子氏。▼11月24日西脇市総合市民センターにて西脇市短歌大会開催。応募数一般の部137首、学生の部473首。一般の部特選1席大江美典氏（西脇市）、学生の部特選濱田沙雪さん（氷丘小4年）、前田紗良さん（東条中2年）、高見歩夢さん（旭丘中3年）。一般の部選者安藤直彦氏。

（芝本政宣）

【西播】 2月5日、西播磨短歌祭部会。内海永子・岡本光代・小松カヅ子・七条章子各氏参加。令和元年度の反省と次年度の運営について協議。▼2月20日、第41回たつの市新宮短歌祭開催。出詠数は一般88首、学生447首。選歌及び講評、小林幹也氏。▼2月26日、西播磨ふるさと文化芸術振興事業実行委員会（書面決議）。短歌祭部会長として尼子勝義が参加。▼3月、佐用町春季短歌大会、コロナウイルスの関係で当日開催は中止、於南光文化センター。選考、受賞通知のみとなる。春季大会賞船引貴明氏「わが集落の戸数がふえる棟上げの掛矢の音の冬空にひびく」。応募54首。選考委員、新家イサ子・菅原艶子・見村文彬・船引貴明・安藤直彦。▼4月15日、令和2年度西播磨ふるさと文化芸術振興事業実行委員会（書面決議）。短歌祭部会長として尼子勝義が参加。▼4月25日開催予定の第36回花梨忌歌会は、新型コロナウイルス感染防止緊急事態宣言のため中止。

（尼子勝義・安藤直彦）

【但馬】 12月13日、「前田純孝賞」学生短歌コンクール入賞作品発表。▼3月20日～4月1日、浜坂先人記念館にて「前田純孝賞」学生短歌コンクール入賞作品展。▼3月26日、澁谷義人歌集『アジア放浪』刊行。

（足立勝歳）

【淡路】 11月、東浦短歌会（代表片山田佳子）では、年刊歌集『給水塔第45輯』を刊行。会員8名、各30首収納、歌数400首。▼12月、千鳥短歌会（代表山田恵子）では、年刊歌集『ちどり24号』を刊行。会員15名、各10首収納、歌数150首。▼3月、淡路歌人クラブ『年刊歌集7』を刊行。会員33名、各10首収納、歌数330首及び全淡短歌祭入賞作品を掲載。発行者清水昭男。

（島田英樹）

受贈歌集・歌書（兵庫県内分）

☆『蠏の宿』２０１９年初夏
藤原　町子　大倉印刷
泡ふける活蟹押さえ包丁を
当てるやいなや手元狂えり

☆『禽眼図』２０１９年11月
楠　誓英　書肆侃侃房
まなうらに羽ばたくかげあ
り　小禽を愛せし兄の弟な
らば

☆『まずしき一冬』
２０１９年11月
矢野　一代　北羊館
顔半分マスクに伏せて黙秘
する被告のごとくまずしき
一冬

☆『河口域の精霊たち』
２０２０年１月
小谷　博泰　和泉書院
廃屋が四、五軒あって朽ち
ておりさびしいバスで古里
を去る

☆『九十九折』
２０２０年節分
小林　幹也　飯塚書店
わが人生日向日陰といれか
はる九十九折ゆくバスに乗
せられ

☆『猪名川』
20号　２０２０年３月
足立　晶子　短歌教室
百までと数え叩きぬ母の肩
七十台を二度繰り返す
老月　良一

令和2年度ふれあいの祭典
兵庫短歌祭 作品応募要項

主　催　兵庫短歌祭実行委員会・兵庫県・（公財）兵庫県芸術文化協会・兵庫県歌人クラブ
後　援　兵庫県議会・兵庫県教育委員会・神戸新聞社

応募要項

作　品　未発表作品一人一首
締　切　令和２年８月21日（金）当日消印有効
送り先　〒675-0016
加古川市野口町長砂1217　新屋修一方
ふれあいの祭典兵庫短歌祭事務局宛
応募料　１，０００円（切手不可）
※応募者に作品集無料送付
応募方法　応募用紙またはＡ４（210㎜×297㎜）の原稿用紙を半分に切ったものに作品１首と郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、電話番号を黒ボールペンで明記し、応募料を添えて郵送してください。
※尚、同サイズ縦書きでワープロ打ち（パソコン）も可。（様式は前述通り）
※応募用紙は当歌人クラブのホームページからダウンロード可。
選　者　兵庫県芸術文化協会・兵庫県歌人クラブ顧問・幹事
特別審査委員　阿木津　英（歌人）塚本青史（小説家）
賞　文部科学大臣賞（予定）、兵庫県知事賞、兵庫県議会議長賞、兵庫県教育委員会賞、（公財）兵庫県芸術文化協会賞、神戸新聞社賞、ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会賞、兵庫県歌人クラブ賞ほか多数。

短歌祭のご案内　◇入場無料◇

日　時　令和２年11月21日（土）
午後12時半～４時半
会　場　兵庫県民会館１１Ｆパルテホール
（市営地下鉄三宮駅から一駅目、県庁前下車すぐ）
内　容　入賞作品表彰と講評等、先立って兵庫短歌賞表彰式
催　し　島内景二氏（電気通信大学名誉教授）講演「和歌と異文化統合
―『五七五七七』は和の韻律」
ふるってのご応募、ご参加をお待ちしています。

◇余滴◇

所在のわからぬコロナの菌に翻弄され、萎縮していた３か月間でした。いつの間にか春から初夏に…。当たり前と思っていた日常がいかにありがたいものかをしみじみ感じています。又みなさまとお会いできますように。
（藤本朋世・山田文・森嶋郁子）

令和元年度収支決算報告書

自平成31年4月1日～至令和2年3月31日

収入の部　（単位　円）

費　目	金　額	摘　要
前年度繰越金	1,696,766	
会　費	727,000	
結社広告費	225,000	前期分114000+今季111000
歌会広告費	44,000	
県助成金	450,000	
県芸術文化協会給付金	0	未開催（新コロナのため）
ふれあいの祭典	74,500	余剰金
懇親会余剰金	17,140	
預金利息	12	10+1+1
寄　付	15,000	杉本、藤原、南、二木他3名、池本、滝川、他
合　計 ①	3,249,418	

収入支出の部　（単位　円）

費　目	金　額	摘　要
総 会 補填	271,297	
兵庫短歌賞（新人賞）補填	51,503	
年刊歌集 補填	329,166	
会報費	627,966	
経常費　通信費	20,722	
交際費	10,000	
事務局費	156,668	
消耗品費	6,530	
印刷費	18,288	
小　計 ②(1)	1,492,140	
繰越金①-②(2)	1,757,278	
合　計(1)+(2)	3,249,418	

会計　石原　智秋

上記の通り相違ありません。
令和2年3月31日　監査　兼貞　靖行

林間阪神支社
石黒　陽子　今西シゲ子
内井　幸子　倉橋　愛子
芝淵田鶴子　登島　政利
南　操子　吉村すゑ子
〒662-0944　西宮市川添町一－一四
芝淵田鶴子方
☎（〇七九八）三六－一九〇七

玲瓏
［玲瓏の會］
塚本邦雄詩歌アカデミア迫眞的想像力の飛翔を期するサンボリスムの殿堂
呈送稿要領見本誌御希望の方は
〒262-0026　千葉市花見川区瑞穂二丁目1-1
ガーデンプラザ新検見川2-906
塚本青史方
Tel／Fax　043-211-6704
http://www.imxprs.com/free/reirounokai/reirounokai

昭和八年創刊
六甲
代表　田岡　弘子
〒673-0845　明石市太寺四－一－三〇
編集委員　石原　智秋　牧野　秀子　黒川　明子　村瀬　美雪　青山　俊代　加藤　容子　小島　和子　西村　紀子　鈴木　裕子　岩本　倭子
会計室　小田　弥生